

清夜

田中彼方

ここのところ、男に犯される夢を何度も見るようになった。相手は毎回同じ男なのだが、夢の中でしか見たことのない顔だ。

男は額に汗を浮かべ、息を弾ませながら乱暴に動いている。目まぐるしく変化する視線が私を捉えるときだけ、どこか観察しているようにも見えた。私の感情には、恐れや悲しみも侮蔑や羞恥、怒りすらない。ただ黙って目まぐるしく変化する男の顔を見つめると、やがて男はうめき声をあげて、私の体に覆い被さってくる。毎晩同じ繰り返しだ。

目が覚めても、体には汗をかいたあとも、興奮したあともない。あの男は一体何者なのかという疑問がぼんやりと過ったあと、自身の感情の起伏を手探りで探す。

私はもともと、欠陥だらけの人間だ。まず、感情と欲望が欠落している。幼い頃は、無邪気にはしゃぐ子供たちから、喜怒哀楽のプロセスを学んだものだ。大人になった今でもそれは変わらない。周囲の人間を幼い頃と同じような目で観察すれば、嫉妬や嘲りといった複雑な感情だって理解できた。感情がどういうものであるのかは、人並みには知っているつもりだった。

しかし、こういう奇妙な夢を連続して見たとき、普通の人間にあるべき感情の動きが想像できない。自身を戒めるべきなのか、相手を憎むべきなのか、それとも羞恥に顔を歪ませるべきなのか。

ハムエッグを綺麗に平らげて、食器を洗い、歯を磨き、スカートの皺を伸ばして着替えながら、考え続けているが、答えは出ない。

いつものように、ストッキングが伝線していないか確かめながら(伝線は恥ずべきことだ)、歩きやすいスニーカーを履き、玄関に鍵をかけて自宅を出た。ふと、夢のことを職場の誰かに話してみようかという考えが頭をよぎったが、男性ばかりで同性はいない職場だし、満足な回答は得られないだろうとそのアイデアを取り除く。それから丸一日、夢のことは考えなかったし、思い出すこともなかった。

ところが、その晩も帰宅して眠りにつくと、明け方近くに目が覚めた。やはり同じ夢を見たのである。いくら忘れたところで、あの男は決まって私を犯しにくる。嬉しくないし、嫌でもなかった。ただ、その冷めた感情が、どこか心もとなく思えて仕方なかった。

そうして、私は気付いた。人間が示す感情の動きを産まれてはじめて、自身のリアルな

感情として学んだことに。不安とはこういうもので、不快とはきつとこういうものなのだ。いくら感情を頭で理解したと思っても、自身の心が動かなければ、それは理解していないと同じことだった。

その日から私は、夢を見るのが待ち遠しくなった。感情を表す言葉にすれば、わくわくしている。にもっとも近いだろう。もともと好奇心というものだけは、持ち合わせている。それは感情というものに対する好奇心だった。感情の動きを自分自身がリアルに感じられることは、恐ろしくもあると同時に、好奇心を満たすものでもあった。

夢の中でされる行為を、これまでのように漠然と見ることはなくなった。自身の感情の変化には常に気を配ったし、男の表情や動きもつぶさに観察した。

すると、この夢は毎回同じ場面を延々と繰り返している訳ではないことが分かってくる。最初にそのことに気付いたのは、行為の最中に男が私にキスをしようとしたからで、これまでの記憶にはないことだった。またあるときは、行為の途中で、うつ伏せにさせられたりもした。相手はいつも同じ男で、犯されるのもいつも私なのだが、情事の内容は毎回微妙に違うのだ。

繰り返される性交が、巻き戻して再生されるだけの同じ夢だと勘違いしたのは何故だろう。注意深く見れば、細部が違うことにもっと早く気付けたはずだった。

自身の不甲斐なさに歯噛みしながら、以降は、どんな些細な変化も見逃すまい、賢明に記憶に刻もうと、改めて決意を固めた。そうしてますます夢の世界にのめりこんでいくことになる。

そんな夜を繰り返しているうちに、私は、私と男の間に絆のようなものを感じるようになった。ふとした瞬間に絡み合う視線や、そうした時だけ、ふっと和らぐ男の表情に、体だけでなく心まで繋がっているような、なんともいえない安心感を感じるのである。いつからか、私は男に犯されているのではないと確信するようになっていた。お互いが望んで行為に及んでいるのだ。あの男は一体誰なのだろう。現実に存在している男なのだろうか。

同じ頃、職場での私の評価も変わってきた。同僚たちは私の些細な変化にめざとく、「あ、今笑ったね」「あれ？今怒ったの？」などと、わざわざ告げてくるようになった。これまでの「愛想のない冷血女」のイメージが変わりつつある。感情の起伏は、まだなだらかではあるのだが、その変化が表情にまで及びはじめたことを私は知った。

ふとした拍子に物思いにふけてしまう。彼が夢の中だけではなく、現実に存在してい

るとしたら。未来に起こるはずの出来事を、先回りして見ているとしたら。こういった少女じみた突飛な想像は楽しいものだった。現実で彼に会えたら、どれほど私の感情は動くのだろう。驚きと気恥ずかしさが複雑に入り交じるのかもしれないし、単純に喜びで胸がいっぱいになるのかもしれない。同僚に咎められるまで想像は続き、その度、慌てて取り繕った。

頭の中で描く楽しい想像は、同時に終わりを想像することにもなった。あの淫らな夢も、いつかは終わってしまうだろう。それはあまりに寂しくて、漠然とした恐ろしさを感じる。その時、これまで以上に空っぽになってしまうような予感がした。

夢との別れ、男との別れを意識したことで、夢の中での行為はますます特別な意味をもつようになった。

少し前から、夢の中の私は自分のものとは思えない淫靡な声を漏らすようになっていて、私はその変化を冷めた目で観察しているだけだったのだが、夢の外にいる私も、もう冷静ではいられない。彼の指や舌が直接私に触れているように感じてしまい、思わず吐息を漏らしてしまう。夢の中の私とシンクロしているのだ。

それを自覚しながら目覚めた最初の朝は、まず自身の体の変化に驚くことになった。首筋にかかった髪は汗で張り付き、汗を含んだTシャツはめくれあがっていて、ショーツも半分下ろされていた。体は興奮から覚めきっておらず、全身が火照ったように熱かった。それはあまりに淫らな姿で、一瞬の羞恥のあとに、いい知れぬ罪悪感を感じ、その感情に動揺した。

どうやら、感情を解き放つことは同時に、官能的な快樂に肉体を委ねることに繋がるようだった。この惨状は、そうとしか思えなかった。

水分を吸い込んだショーツは、ぐっしょりと湿って重く、あまりに不快なため、重い腰をあげて脱いだ。シャワーを浴びたいが、体を起こす気力が沸き上がらない。

さまざまな感情にこのまま身を任せれば、私は快感から逃れられなくなるのではないか。感情の機微も、肉体的な快樂も、まだまだ底は見えない。一体この先どうになってしまうのだろうと考えると、空恐ろしくなる。そのくせ、夢でしか会えない私の男と別れるつもりは、さらさらなかった。

眠る前にシーツを替えるのは習慣になっていた。さらに下着も脱いでしまえば汚すこともないと、全裸になって男を待つ。男と過ごす夜は日を追うごとに濃密になっていく。淫らな行為に躊躇いはなくなり、思いつく限りさまざまなことを試した。

あるときは、男の身悶える表情に喜びをあふれさせ、またあるときは、想像を絶する快感に全身を弛緩させ身を委ねる。お互いに何度も絶頂を味わいながらも、私は快感の隙をみて、夢の場所の特定を試みていた。それは言葉でいうほど簡単ではなく、何度も挫折した。

この部屋は自分の部屋なのか、どこか知らないホテルの部屋なのか。それとも彼の部屋なのか。夢と彼と私を紡ぐ糸が、そこから見つかるかもしれない。眠りにつく前はいくらかでも冷静に考えられた。

目覚めたあとはますます良くなかった。体はただただ重く思考すらままならない。私の隣に彼がいないことが、あまりに耐え難く、気力の萎える原因なのだった。

気だるい体を起こし、出社するのは大変な労力が必要だった。いつそのこと休んでしまおうかと何度思っただろう。それでも結局こうして職場に向かっているのは、意地なのか、習慣なのか。

具合の悪いことに、その日の職場は阿鼻叫喚の地獄だった。早朝に起こった列車の脱線事故により身元の分からない死体が何体も運び込まれている。

遺体の直接の死因と身元の判定のために、死体を切り刻む。それが私の仕事だった。

昼休み、職場近くのカフェでランチをとった。新鮮なトマトが入ったサンドイッチと甘いコーヒーを胃におさめると、その日の最後の遺体の検死にはいった。

遺体の顔は、下顎が半分しか残っていなかった。かろうじて残った左の奥歯に治療痕を発見する。データベースで問い合わせれば、身元はまもなく判明するだろう。

遺体の惨状をみれば、死因も明らかなのだが、それよりも気になることがあった。男の性器に見覚えがあるのだ。

私はそれを右手にのせて包みこむと、左手をそっと添えた。彼のものか判断できないが、かなり近いような気がする。ゆっくりと顔を近付けて、匂いを嗅いだ。無意識に首をかき上げてから、その萎びた性器を口に含んでいた。

間違いなく彼のものだと思った。愛しくてたまらなくなった。それを口に含んだまま、根元にメスを当てると、一気に切り離れた。赤茶色の光沢を放つ、綺麗な断面だった。

標本に用いる小瓶をよく洗い、性器をアルコールで消毒すると、小瓶に特殊な溶液を浸し、ちやぶんと落とした。彼は下向きにゆっくりとゆっくりと沈んでいき、底につんと微かに触れると、今度は上を向いて、やはりゆっくりとゆっくりと浮かんでくる。そして水面に先端を一瞬だけ覗かせたあと、ふわふわと漂った。

私は思わず小瓶を胸に抱きしめると、頬擦りをした。

死体の損傷には誰も頓着しなかった。その日はそのような遺体ばかりが並んでいたからだ。仕事を終えた帰りの道すがら、知人の医師に電話をかけると、医師は機嫌の良さそうな私をいぶかしんだが、頼んでいたものはちゃんと用意してくれていたようだ。ようやく彼に巡り会えた私は自然とステップを踏んで歩いていく。可愛い雑貨屋さんを覗き、アンティーク調の素敵な三面鏡を買った。そのあと病院に寄って、処方されていない睡眠薬を医師にもらった。

部屋に戻るとすぐシャワーを浴びて汗を流した。全裸のまま、ベッドのすぐ横に三面鏡を置いて、薄く化粧をした。記憶にないほど明るい顔をした自分を見て高揚する。綺麗だと思った。いつものようにシーツを替えて、体に巻いたバスタオルを脱ぎ捨てると、ベッドに入った。傍らには彼がいる。もらった睡眠薬を200錠飲み干すのは、思っていたより簡単ではなかった。「騙した医師に迷惑がかかる」一瞬頭を過ったときには、既に意識は朦朧としていた。

やはり私の夢はこれを暗示していたのだろう。夢の中の二人が汗と体液、それから血液にまみれていたのは、こういうことだったのだ。くらくらと視界が歪む。すべての夢は、まさに今日、これから起こる夢の中の出来事を示唆していた。彼は性器だけの存在になって、私に会いに来てくれた。丸一年続いた夢が、ようやく現実になる。そう考えたのが、夢の中だったか現実だったか、もう分からない。

やがて彼はやって来ると、静かに私の隣に潜り込んだ。私は彼をきつく抱きしめて、胸に、首筋に、唇に、キスをした。

長い間そうしたあとに、私は彼を受け入れた。快楽に抗い歯をくいしばってベッドの横を見た。現実で買った三面鏡が置かれていた。はじめて夢の中で覗いた私の顔は、訪れた快感とは裏腹に苦悶に歪んでいるようで、おかしい気分になった。

私はもう現実には帰らない。こうして夢の中でずっと彼と交わっていらればそれで良い。鏡に写った私の顔も体も、まるでミイラのように痩せ細っている。これから起こる快楽の連続の果て、少しだけ未来の私の暗示なのだろう。これでもう、夢を見られなくなる心配はしなくてもいい。安心した私は、考えることをやめ、快楽に身を委ねた。